31187

Citation 2

爾日本国特許庁(JP)

①実用新案出顧公開

☞ 公開実用新案公報(U)

平3-63641

Mint. Cl. 3

識別記号

庁内整理番号

@公開 平成3年(1991)6月21日

E 04 F 13/08

M HE 101

7023-2E 7023-2E 7023-2E

13/14 102

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全 頁)

❷考案の名称 下見板

> ②実 頤 平1-126064

頤 平1(1989)10月27日

砂考 案 者

東京都中央区日本橋室町2丁目5番13号 三井第五別館

東レグラサル株式会社内

砂考 案 者 東久世

道昭

滋賀県大津市園山1丁目1番1号 東レグラサル株式会社

建材開発研究所內

東レグラサル株式会社 人 顔 出面

19代理人 弁理士 中尾 充 東京都中央区日本構室町2丁目5番13号 三井第五別館



明細曹

1. 考案の名称

下見板

2. 実用新案登録請求の範囲

公開 実用 平成 3-63641

面に、それぞれの縁に平行なライン溝を有する下 見板。

3. 考案の詳細な説明

(産業の利用分野)

本考案は、建築物の壁面に使用する、主として窯業系の素材で作られた、下見板に関するものである。

(従来の技術)



237公報には、下見板の上下の周縁部の形状を 工夫する提案が開示されている。

(考案が解決しようとする課題)

特開昭61-129047公報に開示されている下見板の取付構造は、立体感を損なわないよう

に、羽重ねの部分の基材側だけを固定し、下縁部 は固定せずに羽重ねの表面側にしている。しかし、 交通量の多い道路や、新幹線に近接するなどの振 動をうけやすい建物では、取り付けが不十分なた めに、下見板が破損したり、取り付けが緩むとい った事故の恐れがある。

木考案は、このような従来の、とくに窯業系の 素材から作られる下見板が持っていた問題点を解 決して、具体的には、左右の上下方向の周縁部か らの雨洩れ、水漏れを簡単に防止し、かつ、基材 に確実に取付られ、立体感のある形状の下見板を 提供することを目的としている。

なお、窯業系の繋材とは、、セメント、珪酸カルシューム、石膏などの主として無機系のバインダーで固められた素材であって、例えば、木毛セメント、軽量コンクリート、石綿スレート、石膏ボードなどが挙げられる。

(課題を解決するための手段)

複数枚が羽重ねに基材に取付けられる下見板 において、上縁面には、表面に平行な突起条を、 الملد

ここに下見板の上下、左右、および表裏は、下 見板が取り付けられた状態でのそれぞれの位置を 意味する。基材とは、胴緑、柱などの下見板を主 体構造に取り付けるために下見板を固定する部材 のことである。また、合じゃくりの重ね合わせの

面とは、合じゃくりのうちの、表面に平行な面の ことをいう。

(実施態様)

以下、本考案を実施態様の一例をあげ、分かりやすくするために、その取り付けられた状態を 図而に示して、これを参照しつつ、さらに詳しく 説明するが、本考案に係る下見板は、この実施態 様に限られるものではない。

第1図は、本考案の実施態様の一例である下見板を複数枚、羽重ねにして取付けた壁面の正面図である。分かりやすくするために、上下、左右の下見板が外されている状態を示している。下見板は、通常、本図に示されるように千鳥に配列するか、並列に配列して取付けられる。

第2図は、第1図の上下方向(A-A´)の断 面図であって、本考案の実施態様の一例である下 見板の形状と、取付けられた状況を説明するため の図である。

第3図は、同じく第1図の左右方向(B-B´)の断面図である。



下見板1は、裏面4側を基材2に向け、上縁面5に近接する部分で、釘や木ネジなどの止め金具7を用い、基材2に取付けられる。取付のために固定する位置は、羽重ねの基材側に位置する下見板の上縁部が好ましい。外観を損なうことがないからである。

下見板1の上緑而5には、突起条8が形成され、 下縁面6には、滞10が形成されている。一方、 上下方向の縁面12は、第3図に示されるように、 合じゃくりに形成されている。

ここで、上縁面5の突起条8の突端9は、上下 方向の縁面12の合じゃくりの重ね合わせの面1 3よりも表面3に近い側に位置し、溝10の底端 11が上記の合じゃくりの重ね合わせの面13よ りも裏面4に近い側に位置している。

ライン溝14は、横方向には、上記の突起条8、 および溝10のうち、少なくともいずれか一方の、 表面に近い方の側面、上下方向には、左右の合じ ゃくりの、少なくともいずれか一方の、重ね合わ せの面13とにおいて、それぞれ縁に平行に形成

される。本実施態様では、共に、両方にライン溝が形成されている。具体的な取り付けに際しては、突起条8は、一段上の列の下見板15の下縁を面の溝に嵌め合わされ、溝9は、一段下の列の下見板の上縁を一般がある。この嵌合される。この嵌め合いは、機械の下見板は、係合される。この嵌め合いは、機械である。左右の縁面は、隣り合う下見板の縁面と合いの縁面とって重ねられるように取り付けられる。

また、下見板1の上縁部の裏面に、テーパ状の 而取部17を形成すると、下見板1は、基材2と 而接触の状態になって、さらに安定した取付が可 能になり好ましい。

すなわち、正面から見ると第1図の、側面でみると第2図の、横断面で見ると第3図のように取り付けられる。

(考案の効果)

本考案にかかる下見板にあっては、上下に隣り 合う下見板のの接続部は、その上縁部と下縁部が 互いに羽重ねにされ、漏水が防止される。左右に 隣り合う下見板の縁面では、水は、合じゃくりの 重ね合わされている面に沿って流される。下端部 が、千鳥状に取り付けられている一段下の列の下 見板の上縁部の突起条の突端よりも、表面に近い 側に位置しているので、水はその下見板の表面に近面 に導かれ、下見板の裏面には流れ込まない。 毛管現象で奥へ侵入しよううとする水は、 毛管現象で奥へ侵入しよううとする水は、 のライン溝14で遮断され、防水される。 にして、本考案に係る下見板は、上下方向においても、 も十分なため、多くの場合、上下方向においても、 押縁やシーリング材を使用する必要はない。

また、下見板の下縁面は、下に続いて取り付けられている下見板の上縁面と嵌め合いになって係合されているので、固定され、振動で破損されることもない。

羽重ね部は、下見板が二重になっているので、 ボリューム感が惹起され、本考案に係る下見板の 取付けられた壁面は、立体感の溢れたものとなる。 4. 図面の簡単な説明

第1図は、本考案の実施態様の一例である下

見板を複数枚、羽重ねにして取付けた壁面の正面 図である。

第2図は、第1図の上下方向(A-A^{*})の断 而図である。

第3図は、同じく、第1図の横方向(B-B^{*}) の断面図である。

1:下見板 2:基材

3:表面 4:裏面

5:上縁而 6:下縁面

7:止め金具 8:突起条

9:突起条の突端 10:溝

11: 満の底面 12: 左右の縁面 ...

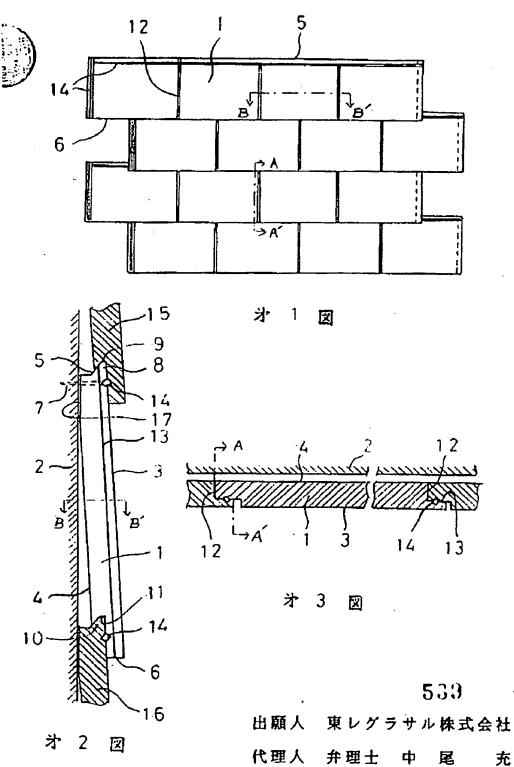
13:合じゃくりの重ね合わせの面

14: ライン溝 15: 一段上の列の下見板

16:一段下の列の下見板

17:テーパ状の面取部

出願人 東レグラサル株式会社 代理人 弁理士 中 尾 充 - 10 -



2000 63641